

私のはんせい記

～「改修設計」事始め～

建築家 三木 哲

●ヨーロッパ再訪

時空を超えて使い続けられる建築文化

1995年の秋、パリで建築見本市が開催された。見本市見学と併せて、ドイツの集合住宅や、バロセロナの建築を見るツアーが企画され、JIAメンテナンス部会員等18名が参加した。

ドイツの集合住宅団地では、レンガ造の窓開口部をシャッター付き二重ガラスサッシに取り換える工事現場を見学した。冬季の寒さに対し断熱性能を向上させ、省エネ化する工事である。

30年前、日本では、外壁等の仕上材の計画修繕が始まったばかりで、建築二次部材や断熱・省エネを目的とした修繕はつい最近である。

1928年に竣工し70年経過した集合住宅が、建設当時の姿のまま、再生保存されていた。ワイゼンホッフ・ジードルングは、コルヴィジェ、グロピウスら近代建築の巨匠が設計した集合住宅群で、築後60年頃再生保存修繕工事を実施し、近代建築の歴史的遺産群として保存展示されていた。

日本の近代の集合住宅は、関東大震災後、建設された同潤会アパート群である。東洋で始めて建設された鉄筋コンクリート造の集合住宅で、先の世界大戦の空襲で焼夷弾爆撃を受けても壊れず使い続けられた13団地は、全てバブル期に建替えられてしまった。近代建築を歴史的文化遺産と位置づけ、建物ごと保存するドイツと、同潤会アパートを全て壊し高層マンションに建替えてしまった日本の建築遺産への考え方の違いを感じ、残念な思いであった。

近代建築の遺産は、建築家・ライトが設計した(旧)帝国ホテルの一部が明治村に残されているケースなど数えるほどである。

ドイツ人の庶民感覚の違いを街並み保存に見た。

シュツットガルト市内から車で20分のところにある伝統的町並み保存地区があった。17～8世紀(300年以上前)に作られた家屋と街並みがそのまま使い続けられている。石畳の広場や道路に勾配屋根の集合住宅が建つ町並み保存地区で、石造やレンガ造の屋根に暖炉の煙突が建つ中層家屋の住まいである。ドイツの人々には数百年経過した家屋の方が戦後建設されたニュータウンより好まれ、人気があるようだ。



駅舎を美術館に改修したオルセー美術館

ストックを大切にせず、スクラップ&ビルドを繰返し、新しがり屋で、すぐに建て替えたがる日本人、大衆の不動産の価値観と大きな差が感じられた。

パリでは街中の建物の外壁を洗い綺麗にしていた。

中でもオルセー美術館の改修工事は見事な再生事例である。この建物は1900年のパリ万博開催に合わせてオルリアン鉄道のオルセー駅の鉄道駅舎とホテルとして建設された。鉄道の近代化で使われなくなった駅舎は1970年頃からフランス政府により保存活動が検討され、イタリアの建築家、ガエ・アウレンティにより美術館に改修することになり、1986年に美術館が完成した。

美術館の中央ホールは駅のホームのドームカルな吹き抜け構造をそのまま活用し、見事な美術館の展示空間として再生している。

次いで、スペインのバロセロナに向かった。

バロセロナでは建築家ガウディーの作品、カサ・ミラ、カサ・パトリヨ、グエル公園など100年前に計画・設計された建物を内部の家具や詳細な納まりまで見て回った。

中でもサグラダファミリアの建築工事現場を見学して、その驚異的な建築の時間的スケールに感動した。100年以上昔に計画設計し、竣工迄さらに200年を要すると言う。

日本の官僚は鉄筋コンクリート造の70年の税法上の耐用年数を、40年程度に短縮し、償却して建て替えを促進しようとしていた。

スクラップ&ビルドを繰返してきた日本の都市がストック型社会に転換し持続型社会に向かおうとする現代、西欧の建築の時間的スケール感に学び、修繕・改修の方向性を考え直すことができた。

それまで進めてきた建築仕上材中心の修繕から、改修再生へ転換する契機となる旅であった。

みき・てつ

(株)共同設計・五月社一級建築士事務所顧問。1943年生まれ。URD・建築再生総合設計協同組合・管理建築士。建築家がメンテナンスを手がけることなど考えられなかった時代から「改修」に携わり、40年以上にわたって同分野を開拓し続けてきたバイオニア。